

肩・首すじ・腰など
**痛いところに
 ひとはり。**

スポールバン



鍼用器具



ユートク薬品

(DMS) 主催の第171回 DMS 定例会が7月29・30日の両日、都内で開催された。変革期を迎え、戦略の転換が問われ始めているドラッグストア (DgS) 業界の新たな在り方が論じられた今回。初日はDgS 企業代表者や識者らによって業界の方向性が議論され、2日目は4つのテーマでセミナーが行われた。

主催者代表のあいさつに立った宗像守氏 (日本チェーンドラッグストア協会事務総長/日本リテイル研究所代表) は、「ドラッグストア業界が10兆円産業になれるかどうかの岐路が今」とした上で、「人口減少・高齢化の進展など市場環境が変化する中、改善や改革ではなく、革命的な戦略転換がある。それをみんなで考えるのが、この定例会」と述べた。

1日目は、経済ジャーナリストである渋谷和宏氏の特別講演と宗像氏による基調講演のほか、「最新ドラッグストアの成長戦略の挑戦」と題したパネルディスカッションが行われた。パネリストには、ウエルシアホールディングスの池野隆光代表取締役会長や昭和女子大学の上原征彦特命教授に加え、関係省庁 (経済産業省、厚生労働省、農林水産省) の職員が参加した。

2日目は、DgSの新機能とマーケット創造に関する4つのセミナーが用意された。「ドラッグストアが行う在宅医療と地域への役割」について講演したウエルシア薬局の小原道子執行役員調剤在宅本部在宅推進部長兼第1営業本部担当部長は、「生活支援と医療支援のどちらも担えるのがドラッグストアである」とし、機能を生かすことができる在宅医療分野への参入が「業界の伸びしろになる」と説いた。

フレンド

**薬剤師とケアマネジャーによる
 残薬解消プロジェクト発足**

関東で21の調剤薬局を運営するフレンド (本社栃木県) は、「残薬解消プロジェクト」を7月17日に発足した。

高齢者が抱える残薬および重複投与問題の解消に取り組むもので、同社が運営する調剤薬局事業部と在宅介護事業部の専門スタッフ (薬剤師とケアマネジャー) で編成するプロジェクトチームが先導する。

チームは、居宅療養管理指導を行っている薬剤師3人とケアマネジャー4人で構成。同社に在籍する約60人のケアマネジャーが担当している利用者の中で、「残薬がたくさんある」「何種類もの薬を飲んでいる」「薬のことで困っている」人の自宅に薬剤師が同行訪問し、残薬の調整や薬の重複、飲み合わせなどについて確認を行った上で、薬の整理整頓、相談、飲み忘れ対策などを実施する。

同社は、「残薬はあるけれど、罪悪感があって医師に伝えられないという患者は多い」とし、「意識改革も同時に行い、処方医や他薬局などとの連携を図っていく必要がある」と、このプロジェクトでは考えている」としている。

なお、厚生労働省がまとめた75歳以上の患者の薬剤費から推計された残薬の年間総額は475億円。長期投薬の増加などによって飲み忘れや飲み残し、症状の変化によって飲んでいない残薬が多量に生じていると言われており、薬の管理を患者任せにしている現況の改善が求められている。

同社は、薬剤師とケアマネジャーからなるプロジェクトチームの活動を通じて、この残薬・重複投与問題の改善を図っていく。